

展開ができていない。宅配業者が運輸省に  
あれだけ妨害されながら、多角的な全国ネット  
ワークを、築き上げたことが何よりの好例で  
ある。

◎今後、益々必要となる地域活性化、福祉機能、  
情報化対応など収益性の高い事業、行政から  
の受託事業など、やれることはいろいろある。

ハ)民営化の弊害と言われる過疎地へのサービス  
については、現に多数の地域で行われている。  
業務委託をベースとした簡易局を駅ビル、コ  
ンビニ（公共料金収納窓口になっている）、  
書店などに設置することで従来以上のサービ  
スが十分に可能である。それでもカバーでき  
ない山奥／離島などについては、補助金を支  
給することで、現在の高コストのおそらく万  
分の一以下の費用でユニバーサル・サービ  
スは可能である。

#### 【国土開発省／国土保全省】

(1)公共事業を現在、複数の省庁（建設省・運輸省  
・農水省・国土庁など）が縦割りで所管するこ  
との重複・非効率に対する対策として国土省に  
統合し、かつ巨大利権の集中を避けて二省にわ  
けたということだが、これでは縦割りの弊害は  
解消されず、巨大利権の排除も効率性の追求も  
達成されない。

(2)巨大利権による癒着の解消と非効率性の改善を  
達成するための方策は

- a.公共事業そのものの大幅削減：特にハコ物、不  
要不急の高速道路、ダム、農道、整備新幹線等
- b.中央官庁は企画立案までとし、実行は中央の権  
限から分離された、地方自治体・独立行政法人  
・民間企業に委ねる。
- c.上記方策と併用すれば国土省は一つでよい。  
二分割による重複や非効率も解消される。

#### 5. 独立行政法人

(1)政府直属の現状から切り離し、共通の根拠法に  
基づいて設立され、企業会計原則で運営されて、  
結果は公表・評価されることは効率運営及び癒  
着防止の意味で現状より格段の改善である。

(2)しかし、所詮多くの第三セクターと同様、実際  
上“ミニ行政”であり、市場原理と離れるだけ、  
利権・談合・癒着・天下りと結びつく可能性が  
高い。諸外国の実例も参考にしながら、不断の  
監視が不可欠で業務内容によっては、将来、完  
全民営化の方向で検討すべきである。

#### 【D. 審議会等】

1. 現在、審議会がこれ程多く存在し、行革の一大  
テーマになること自体驚くべきである。裁量行政

の隠れ蓑に活用されて来たものも多く、思い切っ  
た整理が必要である。

2. その意味で「審議会等への整理…….に関  
する検討」にある休眠等の審議会の廃止基準は甘  
い。これでは休眠中の審議会の多くは（基準に対  
する対応策が可能のため）廃止されない。

#### 【E. 公務員制度】

1. 一括採用（両論併記だが）、人材の一括管理、  
退職管理の適正化、天下り規制など、縦割り行政  
の弊害防止、企業との癒着回避を目指した提言が  
織り込まれていることは評価したい。

2. ただし、残念ながらいままでの行革運動の歴史  
の中で最も骨抜きにされた分野である。エージェ  
ンシー機構についても“身分だけは公務員”とい  
う要求が強いことも、現在の公務員制度いかに居  
心地がよい（甘い）制度であることの何よりの証  
拠である。実態面でこの趣旨が活かされる運営を  
期待する。

3. 癒着防止に関しては制度上の対応もそれなりの  
効果はあろうが、中央・地方・現業いずれの場合  
も巨額の予算と裁量（恣意）に基づく配分が行わ  
れる限り根絶は不可能である。「小さい政府」の  
実現と公開入札、情報公開が不可欠と考える所以  
である。

4. 公務員制度の最大の問題は失政に対する責任の  
追及が制度的に保証されていないことである。必  
要な立法措置も含め、公務員の責任制度を確立す  
べきである。

#### 【おわりに】

以上述べてきた如く「報告」は、我々の予想より  
進んでいる内容で、評価すべき点も織り込まれては  
いるが、一方、複雑な利害からの主張を“まとめる”  
ための現実的な制約からか、行政改革というにはあ  
まりにも不十分な点多々あることも事実と言わざ  
るを得ない。

しかし、日本の長い歴史という“パースペクティ  
ブ”の視点で捉えてみると、日本の現状は我々自身  
が想像している以上に深刻なのではなからうか。そ  
して、サイレント・マジョリティとしての国民は、  
本能的にその事を知っているのである。

特定利権からの発言は大声であるだけに無視しが  
たいようだが、客観的な立場が弱くなるほど、その  
抵抗がなりふり構わぬ凶暴性を帯びてくることは洋  
の東西を問わず、歴史上いくらでも例がある。それ  
を乗り越えるのがまさに行政に対する政治の優位性  
である。21世紀も見据えた、政治の真のリーダー  
シップが発揮されるか否か、固唾を吞んで注視して  
いる。

<完>